

# 急速減感作療法を行った15症例について。

(飼い主様の感想を交えて)

牛草貴博 中村孝行 野田正志 土屋和弘

TAKAHIRO USHIGUSA TAKAYUKI NAKAMURA MASASHI NODA KAZUHIRO USHIGUSA

関内どうぶつクリニック

## 要約

当院で行った減感作療法のうち急速減感作療法を行った 15 症例の治療効果をまとめた。急速減感作療法は通常法に比べオーナーの来院負担を減らすことが出来たため満足度は高く、また通常法とほぼ同様な治療効果が認められた。減感作療法は薬物療法に比較し患畜への負担が少ないうえに急速減感作療法によってオーナーの負担を減らすことが出来るために有用な治療の一つだと考えた。

## はじめに

近年、皮膚の病気を主訴に来院する患者は増加しておりその中でもアレルギーを疑う症例は診断、治療の中で重要な位置を占めている。特にアトピー性皮膚炎とされる食べ物以外の環境因子によるアレルギーの診断、治療は困難を極め、様々な診断、治療が行われているがその多くは従来のステロイドを中心とした薬物療法が使われている。その中でアレルギー疾患に対する減感作療法は WHO において「アレルギーの自然治癒を促す唯一の治療法」とされ人医でも広く使われているものである。小動物領域でも現在積極的に使われてきており数多くの論文が発表されている。今回最近発表されてきた急速減感作療法というものにスポットを当て、その治療効果と、治療を行った飼い主様にアンケートをいただきその結果をあわせて供覧したい。

## 方法と材料

全ての犬において、寄生虫疾患、細菌性疾患、その他の除去診断を行った結果アレルギー疾患が疑われたためにアミノプロテクトケアを用い除去食試験を行った。その結果皮膚の痒み、脱毛、発赤の認められる症例について Willemse の診断基準にもとづき、環境中のアレルゲンによるアレルギー性皮膚炎を疑い感作抗原の特定のために、スペクトラムラボジャパンにおいて IgE 検査を行った。その IgE 検査の結果に基づき RK VETS SERVICE を通してスペクトラム ラボ アメリカにて減感作薬を依頼し調合した。調合された減感作薬は表 1 のプロトコールに従い皮下注射を行った。また急速減感作導入時にはアナフィラキシーショックを考慮し、朝から入院にて静脈確保を行った上で開始した。

表 1 接種プロトコール

バイアル 1/720 低濃度

1 日目 入院接種

9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00
0.1ml	0.2ml	0.4ml	0.6ml	0.8ml	1.0ml	1.0ml	1.0ml	1.0ml

バイアル 1/180 中濃度

5 日	10 日	16 日	22 日	28 日	38 日	42 日	58 日	68 日
0.1ml	0.2ml	0.4ml	0.6ml	0.8ml	1.0ml	1.0ml	1.0ml	1.0ml

バイアル 1/60 高濃度

78 日	92 日	113 日	143 日	173 日	203 日	233 日	253 日
0.3ml	0.5ml	0.5ml	0.6ml	0.8ml	1.0ml	1.0ml	1.0ml

その後は基本的にスペクトラムラボジャパンから提示されたプログラムに則り、減感作薬を皮下接種した。

治療の効果は下表を用いてスコア化した。(表 2)

表 2 治療評価スコア

スコア	評価	状態
A	著効	治療開始前の臨床症状は完全に消失した
B	有効	治療開始前と比較して、臨床症状は明らかに改善した
C	やや有効	治療開始前と比較して、臨床症状は改善したが、治療に対する反応は少ない
D	変化なし	治療開始前と比較して、臨床症状に変化はない
E	悪化	治療開始前と比較して、臨床症状は悪化した。

またオーナーに対するアンケートは無記名、13項目で回答は選択式とし一部感想などは記述式とした。

オーナーの評価は表 3 によりスコア化した。

表 3 オーナー満足度評価スコア

評価スコア	満足度
A	とても満足している
B	満足している
C	どちらでもない
D	不満である

## 結果

IgE 検査の結果、すべての症例で何らかの項目に陽性反応が認められた。その項目を元に米国で作成した減感作薬が届くまでの間、シャンプー療法のための症例、または痒みが激しい場合にはプレドニゾロンを使用した症例も 症例あった。今まで当院で急速減感作導入を行った15症例すべてにおいてアナフィラキシー等の重篤な副作用は認められず、その他確認できる副症状は認められなかった。減感作療法を行った 15 症例は5症例はA(著効)、7症例はB(有効)、2症例はC(やや有効)、1 症例はD(変化なし)、E(悪化した症例)は 0 であった。

表 4 治療評価

犬種	年齢	スコア	オーナーの評価	接種直後の状態
プードル	2	A	A	直後元気がなくなる
A コッカー	2	B	B	問題なし
ケアンテリア	1	B	B	問題なし
チワワ	1	B	A	接種時の痛み
シーズー	5	C	C	問題なし
ビーグル	2	A	B	問題なし
キャバリア	3	A	A	問題なし
バセンジ	4	A	A	元気の低下
パグ	1	D	D	問題なし
ラブラドル	2	B	A	問題なし

プードル	4	B	C	問題なし
シーザー、マル	7	C	C	問題なし
シーズ、マル	4	A	A	問題なし
プードル	2	B	B	問題なし
ダックス	2	B	A	嘔吐後虚脱

この中の2症例について経過を供覧する。

#### 症例1

アメリカンコッカースパニエル

2歳、オス(虚勢済み)

1歳になった頃より皮膚がただれてきた。いくつかの病院でアレルギーと診断され、ステロイド剤を中心とした治療を受けてきたもののどんどん悪化してくるということで来院。





初診時は皮膚全体に痒みがあり、表皮小環、脱毛、発赤が多数認められ、外に散歩に行くと皮膚全体が真っ赤に腫れ上がるので散歩には行けないとの主訴であった。

検査の結果よりマラセチアおよび細菌感染が重篤であったためにそちらを管理しながらインターフェロン療法を開始した。インターフェロン療法開始3ヶ月時には一定の効果が認められ発赤、痒みはかなり軽減されたものの5ヶ月目には効果があまりみられなくなった。オーナーと話し合ったところ減感作療法を希望されたので IgE 検査を行い初診時より8ヶ月目に急速減感作導入を行った。

効果は開始後2ヶ月より認められ掻痒、発赤の改善が急速に認められ3ヶ月目にはほぼ症状は認められなくなった。現在開始後約1年2ヶ月経過し、春から夏にかけて一時的に悪化することがあり、二次感染のコントロールのために投薬を行う時があるものの順調に経過している。





## 症例 2

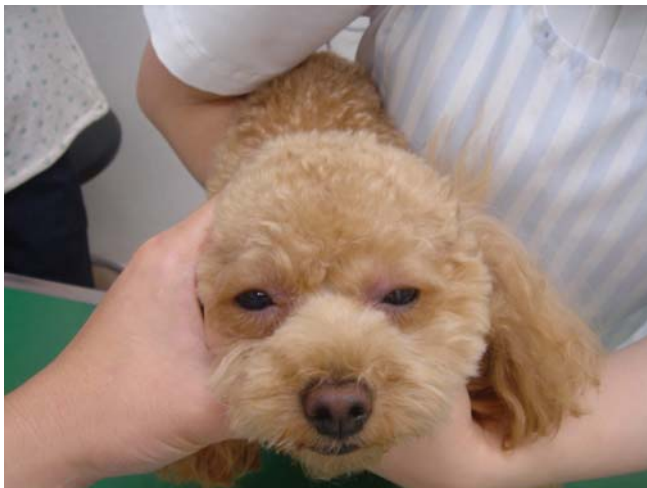
### プードル

2歳8ヶ月歳 メス(避妊済み)

6ヶ月齢より目の周囲をかゆがるようになり、涙が多く出てくるということで来院。目の周囲は軽度の脱毛が認められ発赤が認められた。眼球および結膜には大きな異常は認められなかった。

皮膚一般検査では異常は認められなかったためにアレルギー疾患を疑いアミノプロテクトケアを使用した除去食試験を行ったところ多少の変化はあったものの十分ではなかった。

治療開始前





治療開始後



オーナーに減感作について提案したところ治療を望まれたのでスペクトラムラボジャパンにおいてIgE検査を行った。出てきた検査の結果を基に初診時より 2 年経過後に急速減感作導入を開始した。その後減感作治療を継続したところ約 2 ヶ月後には目の周囲の皮膚症状は消失し発毛が認められた。現在治療開始後 1 年を経過しているが順調に経過している。

#### 考察

減感作療法は古くから存在した治療法であるが日本の獣医療ではまだ積極的に利用されていない。これはまだ治療効果に関するデータが集まっていないということや、詳しいメカニズムがわかっていないということが大きな要因であろう。ただ人医においては WHO がアレルギーを治すことのできる唯一の治療法と認めたことからこ

れから獣医療でも積極的に利用されていくと考える。

今回我々が利用した減感作療法はスペクトラム社が提供するプログラムで同社が行う IgE 測定をもとに製造されたものである。採血のみでデータをとることのできるこのプログラムの大きな利点は、導入が非常に簡便で、患者の負担が少ないことである。また当院では従来行ってきた減感作療法は注射のための来院負担が導入の大きな壁となりなかなか症例が集まらなかった経緯がある。

今回行った急速減感作療法は通常法に比べ来院頻度を大きく減らすことができたことにより導入の敷居を下げることで治療希望者が大きく増加した。

過去の文献では急速法は通常法に比べてその治療成績、リスク等に差がないことが報告されている。今回我々が得た結果においても過去に通常法が報告している結果と大きな差がないことがわかった。またオーナーに行ったアンケートの結果は我々が判断したスコアと比べて多少の相違があるもののほぼ近似した感想を得ることができた。

急速減感作法はまだ症例が少なくデータが非常に乏しいためにまだ治療が普及していない。ただ通常法に比較し飼い主の負担が少ないために治療を希望されるオーナーがより増えるのではないかと考えられる。